

狛江の年中行事Ⅱ

Ⅱ 正月の行事(続き)

閻魔様の日・ヤブ入り 1月16日は、エンマ様の日・オエンマ様・オサイニチ(お齋日)などとよばれています。この日エンマメシといって小豆飯を炊いて仏壇に供える家、茶飯を供える家、また、白い御飯を山盛りにして「お閻魔様に」といって供える家もありました。

寺では、この日、閻魔様の掛軸を本堂に掛けるので、お参りに行く人もいました。この近在では、喜多見の知行院、登戸の善立寺など、お閻魔様の日には露店も出て、にぎわうこともあったそうです。

この日は、また、ヤブ入りといわれ、雇い人は親元へ帰り、仕事休みになります。

山の神 1月17日を山の神とよんで、先山・木挽・製材業者など、伐採や製材に関わる人たちは、仕事を休むものでした。ノコ(鋸)・ナタ・マサカリなどの道具を清め、お神酒・お明かり・神、塩と水などを供えます。昭和10年代まで、同じ仲間の新年会があり、このような集まりを山の神講とか、山の神などとよんでいました。8月17日も山の神で、同じように道具に供え物をしました。山の神の日には、山に入るな、立木にさわらな、といわれています。毎月17日が山の神で、切る商売は床屋でも休むものだったという人もあります。

二十日正月 1月20日を二十日正月、しまい正月ともいい、この日の朝、雑煮を食べる家もあります。

恵比須講 1月20日 エビス講・エベス講・エベス様・オイベス様・エベッサンなどとよばれています。恵比須様と大黒様に、お明かりとお神酒を上げ、お高盛りにした小豆飯、または白い御飯やそば(うどん)と尾頭付き(タイは上等で、多くはサバやサンマ)などをお膳にのせて供えます。葉付きの大根2本とか葉付きの二股大根を供える家もあります。お金が溜まるようにと、家中のお金をかき集めて、1升せきに入れて供えたり、倍にしてもらおうようにと財布ごと供えたりもしました。

おせち 正月中に行うオセチ(お節)は、親族などが集まる年賀の会のことで、年頭のあいさつを交わし、テメエ(手前)料理の正月料理をいただきます。本家や分家のあいだなどで、それぞれの家のオセチが何日ときめてあって、集まったものでした。

正月の門付け 正月には、家々の門口に来て芸をする、いろいろな門付けの人たちが来たものでした。三河万歳、獅子舞い、角兵衛獅子、猿まわし、春駒など。三河万歳といわれた万歳には、お大尽の家などを毎年決まって訪れるものと、家ごとにまわって歩く門万歳などとよばれるものがありました。獅子舞いには、外からやってくる人たちもありましたが、小足立・和泉・猪方・駒井・岩戸など、各地域の若い衆などによる「悪魔っばらい」の獅子舞いも、大正の末ころから行われていました。

Ⅲ 2月～4月の行事

次郎の朔日 2月1日を次郎の朔日といって、正月の餅で雑煮をつくる家もありました。農家では、仕事を休むこともあったようです。元日を太郎の朔日などという人もいます。

節分 2月の3、4日ころ。立春の前日で、年の変わり目とされていました。この日を年越し、本年越し、年取りなどともいっています。夕方近くになると、大豆を炒り、その火で豆がらなどに刺したイワシの頭を焼きます。そのとき、唾を3回かけながら、「よるずの虫の口を焼く」などと唱えごとをします。こうして焼いたイワシの頭のヤッカガシ・ヤイカガシ(焼き嗅がし)を、ヒイラギの枝あるいはサンショウの枝などといっしょに、トンボグチ(主屋の入り口)に差して魔よけ・厄よけにします。炒った豆は神棚に供え、宵のうちに撒きます。その年の恵方あきに向かって撒き、神棚から始めて主屋のなかを撒き終わると、物置や納屋、井戸のあたりでも撒いて、その後、鎮守様まで行って撒いてくる人もありました。

神棚にはお神酒とお明かりを上げ、年越しそばを食べるものでした。

メカリばあさんの日 2月8日 この日の晩、メカリばあ・メカリばあさん・メカシばあさん・ミカエリばあさん、などとよばれる妖怪がやってくるといわれていました。メカリばあさんは病気や災厄を持ってくるので、家の中に入られないようにと、竹竿の先にメカイ(目籠)を結わえつけて家の軒先に立てかけます。メケエ・ミケエなどともよぶ目数の多い、この籠を高く掲げておくと、たくさんの目が見張っている、メカリばあさんが入れなくなるといいます。

この夜、白い御飯にケンチン汁、小豆の入ったオコト汁などを食べる家もありました。

雹祭り 2月の初寅の日、駒井の日枝神社では、雹よけ祈願の祭りが行われています。小足立では、月遅れで3月、初寅祈念祭として雹祭りが八幡神社で行われます。覚東でも3月初寅に雹祭りがありました。が、明治の末、5月24日に雹害にあってから、5月24日に雹祭りをを行うようになりました。

初午 2月上旬 節分を過ぎて最初の午の日が初午で、稲荷様を祭り、稲荷講が行われます。

初午には、赤飯や油揚げやめざしなどを、自分の家の稲荷から親戚の稲荷、鎮守様の境内にある稲荷へと、供える人もありました。稲荷には、個人の屋敷神のほか、一族でまつるものと、地域の縁で結ばれる人たちでまつる稲荷とがあります。初午の日、それぞれの稲荷では、伊豆美神社の神主を頼むところもあり、氏子だけで参拝するところもあります。猪方の椿森稲荷では、玉泉寺の住職が祈禱をすることになっています。

お供えしたお神酒などをいただいて、飲み食いする直会なごらいの稲荷講は、近年、神社の社務所や料理屋を借りるとか、祭りのあとの箱根などへの親睦旅行先で行うところもありますが、昭和30年代ころまで稲荷講の多くは、その年の当番の家を宿にして行っていました。稲荷講では、ご馳走を食べ、酒をくみかわしながら、その年の農作物の作付けの子定や作柄の子想、作り方の体験談などを語りあい、また、世間話に花を咲かせたものです。稲荷講は、ピシャ講・食い講などもよばれていました〔猪方〕。

昭和10年近いころまでは、子どもたちが稲荷社の傍らに、むしろや丸太などで小屋掛けして、中に炉を切り、初午の前夜の宵宮には、餅を焼いて汁粉を食べたり甘酒を飲んだりして、一晩中、太鼓をたたいて楽しんだものでした。子どもたちの小屋掛けは、粕江のどのムラでも見られましたが、小足立と覚東では、昔から大人の集まる稲荷講は行われていなかったそうです。

雛祭り 3月3日 三月節句、女の節句、桃の節句などともいい、お雛さまを飾って、菱餅や白酒（多くは甘酒）などを供えます。長女の初節句には、親元（嫁の実家）から内裏さまを、仲人や親戚などからは、そのほかの雛人形が贈られます。お返しに、菱餅に蛤などのナマグサとキナコを添えて配ったものでした。

お雛さまは、子どもの悪い病気を背負ってくれるので、毎年出して飾るものだといひます。出すのが遅れると、お雛さまは「お花見に行きたいっ」と泣くのだという人もあります。お節句がすんだら早く片付けてしまうもので、長く出しておくくと娘が縁遠くなる、なかなか嫁に行けない、などといわれていました。

梅若様 3月15日 この日を梅若様といひて、小豆飯を炊いて仏様にあげる家、梅の花を神棚や荒神様に供える家もありましたが〔小足立〕、梅若様のいわれについての言い伝えは聞くことができません。

梅若とは、謡曲「隅田川」で有名な梅若丸のことで、3月15日は、その忌日であり、農事にとっても大事な意味をもつ日でした。

春の彼岸 墓参りをし、変わりものをこしらえて仏壇に供えます。「入りばた餅に 明けだんご なかの中日 五目飯」とか、「中日ばた餅 明けだんご」などといわれるように、変わりものは、ばた餅や草だんご、五目飯など。「やったり、とったり彼岸のばた餅」ということばもあって、隣近所や親戚同士で、ばた餅をやりとりしたものでした。

上小足立では、いまでも彼岸の明けの日に、女衆による念仏講の集まりがあります。

彼岸の中日は、かつてはムラの道普請の日で、一家に一人は出て、砂利を敷いたり、穴ぼこを埋めたり、草を刈ったりしました。

社日参り 春秋ともに彼岸の中日にいちばん近い戊の日を社日とよび、この日、社日参りといひて、7カ所の神社にお参りする人もありました。七つの石の鳥居をくぐるとよいとか、七とこ参りをすると、中ちゅう気にならないといったものです。社日のお日様には、ありがたい力があるので、下しもの世話にならぬように、ふんどしや腰巻などの下着を、社日に干すとよいことも知られていました。

花祭り 4月8日 お釈迦様の誕生を祝って、寺の本堂の前には、甘茶で産湯を使ったという、釈迦の誕生像を納めた小さな花御堂が置かれ、甘茶が用意されます。この日は、四月八日、お釈迦様の日などともよばれ、参詣の人たちは、甘茶を釈迦仏にかけたり、振る舞われたりします。和泉の泉龍寺や玉泉寺では、この行事が今でも見られます。かつては、瓶や徳利などを持ってお参りに行き、甘茶をいただいて帰ると、長虫（蛇）よけに家のまわりに少しまいたり、虫刺されによいとか、目につけてもよいなどといひて、とっておいたりしたものでした。また、この日、半紙などに「千早ぶる卯月八日は吉日よ…」と虫よけの歌を書いて、便所に貼っておく家もありました。お釈迦様のだんご、お釈迦だんごなどといひて草だんごをつくったり、草餅をつくったりもします。

（粕江市文化財専門委員 中島恵子）